

五逆者

設たい我われ仏ぶつを得えたらんに、十方じゅうほうの衆生しゅじょう、至し心しん信樂しんがくして、我が国くにに生まれんと欲ほつし、乃至な至い十念じじゅうねんせん。若もし生まれずば正覺しょうがくを取とらじ。唯ただ五逆ごぎやくと正法しょうぼうを誹謗ひぼうせんとをば除ぞく。

念仏して浄土へまいる。これよりほかに真宗の教えはない。しかし、その教えをいくら聞いていても、自分の胸がすつきりして来ない、いくら念仏しておっても、自分の内心が助からない。何が一体、私の心に雲をかけるのであるか。これが真宗の教えを聞くものの最後の悩みであろう。

この悩みの原因がどこにあるか。親鸞聖人の御苦勞は、実にこの一点を切り開くことにあつたのである。

何故念仏しても助かつて来ないか。その理由は極く簡単である。

第十八願を読み違えているからである。第十八願には、念仏する者は助けると書かれてある。しかし、この念仏には厳密な限定がついている。但し書きがついている。聖人は、この但し書きをごまかしなしに読み開いた方であつた。

それは、至心の一語である。

第十八願は、一切衆生を助けずばおかないという願いである。しかし、二心の者を助けるとは書かれてない。ここに眼をとめられたのが親鸞聖人であつた。「私には一心がないの

だ。至心・信樂・欲生とあるけれども、これは人間の心ではない。私のものとしては頂けない心だ。どうしても至心という心があるならば、これは如来の心でなくてはならない。」と。ここから浄土真宗が開けたのである。

私共は念仏して浄土へまいりたいと思う。しかし、それは一心ではない。かくしもつているもう一つの心がある。それをぐっと引き出されたのが次のお言葉である。

唯だ五逆と正法を誹謗せんとをば除く。

至心に信樂して、浄土へまいりたいと願うものは必ず仏にするけれども、五逆と正法を誹謗する者は許されない。これが第十八願である。

五逆とは何か。誹謗正法とはどういうことか。

五逆は、第一に父を殺す。第二に母を殺す。第三に阿羅漢を殺す。第四に和合僧を破る。第五に仏身より血を出す。これが五つの逆罪である。

第一と第二は総じて親を殺すということである。親は命の源である。親を殺すとは、自らわが命の源を断つのである。姥捨山という山がある。信州だけにあるのではない。一軒一軒の家の中に大きくそびえている。

第三に阿羅漢を殺す。阿羅漢は修行を積んだ人。先生と呼ばれるような人達である。私共は尊い修行を積んだ人をなかなか素直に尊敬しようとはしない。

殺し方にも色々ある。ピストルで殺すこともあれば、刀で

殺すこともある。原子爆弾で殺すことも出来れば、針一本で殺すことも出来る。そうかと思うと、真綿で首を絞めるといふのもある。更に黙殺という殺し方があり又笑殺という殺し方もある。ものを言わぬ、というのも殺しているのであれば、こんな話はききたくない、というのも殺しているのである。

私共には、本当に頭を下げて、話を聞くということがあるだろうか。一生の中に一ぺんあるだろうか。お寺へ詣ってお説教を聞いたということは、仏法の功德を積んだことなのか、五逆罪を重ねたことなのか。

第四に、和合僧を破る。和合僧は、仲良くしなければならぬ集まり、ということである。内輪仲良く、というのが和合僧である。家も和合僧である。村も和合僧である。国も和合僧である。この和合僧を破るもの、一つは悪人、二つは善人。悪人は身体で破る。善人は心で破る。この善悪の二人を兼ね具えたのが私という人間である。凡そ、その友を憎む者はこれを殺す者なり、とキリストは言われた。

第五に、仏身より血を出す。仏を殺すということである。仏法を聞くとは仏様に仕えることである。しかし、生きた仏様に仕えている仏教徒は数少ない。試みにわが家のお内仏を見るがよい。ほこりがたまつて、お華が枯れて、お仏飯があがらない。しかも平気である。みな死んだ仏を祀っているのである。生きた仏に仕える気は微塵もない。仏を殺して、仏を祀っているのである。しかし、仏を殺しても、仏は死なれ

ないから、それを仏身より血を出すというのである。

木像や、絵像にならばまだしも、あけがらす暁鳥先生という生きた肉身の仏様に仕えて、私共は何をしたか。御病気になられても、ロクに看病もしなかった。お見舞いにさえ行かなかった。そして、生きておられる間から葬式の相談をし、死なれた後の心配をした。先生を生きながら殺していたのである。

これが五逆罪である。この五つの罪の一つがあっても、浄土へはまいれない。断じて除かれるのである。この五逆の罪は何から出て来るのか。罪をまぬがれるためには罪の源を断たねばならぬ。果たして、その源は断たれるだろうか。その罪の源を指摘するのが、次の誹謗正法である。

誹謗正法は、第一に、仏なしという。第二に、菩薩なしという。第三に、仏法なしという。第四に菩薩法なしという。簡単に言えば、仏も法もない。俗に「神も仏も無いもんじゃ。」というのがそれである。

では、何があるのか。自分だけがあるのである。自分さえおればよい。ここから、親殺しも、兄弟殺しも、友達殺しも、仏殺しも出てくる。少しでも永く生きたい。少しでも楽をしたい。そのほかに、仏も要らなければ仏法も用がない。これが人間意識の本質なのである。人間の生活というも、人類の文化というも、すべてこの意識の所産にすぎない。

私共が宗教を求め、極楽を願うというのもこの意識の延長である。私共はこの心で助けを求め、この心で念仏しておる。

その私を、照らし破られたのが第十八願である。

除く。

除かれて、どうなるか。

そのまま。

「生きたければ、生きよ。」「樂をしたければ、せよ。」かくいわれて、暗黒にただ一人の自分が残る。

大事な命が、刻々と磨りへらされてゆくという事実だけが現れてくるのである。

自分はこの世に居たいけれども、自分をこの世におかない力がもう一つある。確かにある。私を許さない力が厳しく動いている。私の心が何を求めようと、無関係にこの力は働いてゆく。これが人間存在の根源力であった。この力によって私は生きている。

仏を殺すもよい、和合僧を破るもよい。殺しながら、破りながら、私自身は、この力によって、念々に破られ、刻々に殺されてゆく。

私の心は、この力に逆らいつづけているけれども、私の身体は、寸分の狂いもなく従いつづけている。

仏に背き、仏を殺す私。その私を有無をいわさずに連れてゆく力。現にその力に従って私は生きている。

「至心信樂して、我が国に生まれんと欲し、乃至十念せん。」聖人はこのお言葉の意義をこの事実に見出された。

五逆と謗法ぼうぼうの私が、五逆と謗法ぼうぼうのままに、念仏してきた。

口が念仏したのではない。心が念仏したのでもない。身体が念仏したのである。

この念仏は私が称えたのではない。如来が私の身体を使って念仏されたのである。私の身体が奏でた無常の歌は、私に於いて念仏された如来の声である。

私の身体は、一刻といえども、この如来の念仏を忘れることがない。

頭が白くなることも念仏である。歯がぬけることも念仏である。物忘れも念仏である。嘘つきも念仏である。姦通も念仏である。泥棒も念仏である。人殺しも念仏である。如来の念仏である。身体の念仏である。

人殺しは謗法の心から出る。泥棒も、姦通も、嘘つきも謗法の心から出る。しかし、この事実が、「除く」の一語に照らし破られる時、即ち念仏の事実となる。

この身体の事実を再び心が映した時に、口にしやうみやう称名となるのである。南無阿弥陀仏の称名は、心が身体に降参した姿である。身体の念仏に心が降参した時に、口に称名となるのである。身・口・意の三業が、如来の念仏に貫かれて、私共の往生は成就するのである。蓮如上人が

信心獲得すというは第十八の願をこころうるなり。この願をこころうるといふは南無阿弥陀仏のすがたをこころうるなり。

と申されたのは、ここである。三毒の身体がそのまま念仏し

ている。天地の一木一草、ことごとく南無阿弥陀仏でないものはない。この一大事因縁にうちまかせて私の往生を治定するるのである。

この念仏にはからわれて任運に法爾に、生活をさせていた。何を考えても、何を為しても、関係なく、一切の責任を如来が引きうけて、自由自在に導いてくださる。そういう力が、この世界の根本力として働いている。その力を信じ、その力にまかせて生きてゆくところに、等正覚の信心があるのである。